

長寿社会とおむつ事情

瀬領町 早瀬ふみ子

今から六十五年ほど前、当時小学生だった私は、押し入れの中のおむつを見つけた。これは生活の中で祖母が、せっせと手縫いで作ったもので、使われなくなつた布（浴衣やシャツなど）を再利用していた。それらは、ぼろ切れになるまで何度も洗って使う、節約を旨とする昭和時代の知恵でもあつたのだ。

その後、私たちの生活が豊かになるにつれて布のおむつは無くなり、現在の紙おむつが登場する。清潔で快適なおむつは年齢を問わず使われていて、色んな種類があると聞く。中には香水の香りまでついている

のもあるそうである。それらが店頭にところ狭くと並んでいて、いつでも手軽に手に入れることができるのだ。

私は介護保険のサービス利用者の一人である。介護保険の利用には、必ずケアプランが必要だ。ケアプランを自分で作成することも可能なので、私は自己作成を選んでいる。自己作成するに当たって、全国マイケアプランネットワークという組織に入会。そのネットの会から、いろいろな介護保険関係の知識等を得ている。

全国マイケアプランネットワークは、介護保険のサービス利用にあたって、ケアプランのマイケアプラン（自己作成プラン）を奨めている会。自己作成をする人は、分かりにくいことが多くあり、困ったことや不審に思うことを、オンラインでその会に聞いたりもできる。

当然、介護には、おむつ問題が欠かせないものとなつている。ある日のオンラインでの例会のことである。

コロナ感染予防の自粛期間を利用して、通販でいろいろなおむつを購入し、試してみたという方の話があつた。実際に体験して、着け心地、吸水性など、それぞれに

特徴があり、何に重点を置くのか、使う目的によって選ばないと、何でもいいというわけではないということが分かつたというのである。とてもかわいいイラストデザインのもあり、「これなら穿いてみたい！」などと話に花が咲いた。「確かに、こういう機会にこんな自由研究をやってみるのもいいですね！」となつた。

さらに、直接作っている業者さんを講師に招いて、学習会を開いた方もいた。その感想から、現代のおむつ事情は、健康な人たちにも取り入れられており、用途に合わせ、価格も通常のものから高いものまで幅広く製造や販売をしているらしいことが分かつた。中でも、現在の介護施設や住宅介護、あるいは地域密着サービス利用の方が安心して利用できる下着となつていると言

う。実は、私もつい先頃おむつを体験した。集中治療室でベッドの上の生活を強いられたまままで排便もしなければならなくなつたのである。『おむつを着けたまま排便してください』と言われ、（困つたことに、恥ずかしいことに……）が頭を過ぎつた。しかし私の思いは差し置いて、厚い看

護とおむつのお陰で、ちゃんと排便の腸活

(コンチネンス)生活が続けられた。おむつはまさに文化の進歩の賜物でありとてもありがたかった。

介護保険制度が取り入れられてから二十余年余りが経つ。その間、サービスを利用する人が増え続け、平均寿命は上がってきている。専門家の調査によれば二千五十年には人間の平均寿命は百五十才に、そして四世代・五世代が同じ時代に住むことも可能な時代が来そうだとも言われている。だんだん長寿になり死が遠のく、だからこそ、今、生の在り方が問われている。

介護保険の第四条(国民の努力及び義務)には、「要介護状態となった場合においても、進んでリハビリテーションその他の適切な保健医療サービス及び福祉サービスを利用することにより、その有する能力の維持向上に努めるものとする」という文面がある。また、この頃よく医療のジャンルで「ICD IIアドバンス・ケア・プランニング」が話題に上っている。

最期の時まで、自分のことは自分で決める、日々の意思決定の積み重ねが大事なのだ。私も病気や障害を持ちながらも、自分

らしく生き抜きたいと思う。